

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18330107

研究課題名（和文） バングラデシュにおける清掃労働者諸集団の社会移動の多様性

研究課題名（英文） Diversity of Social Mobility of Sweeper Groups in Bangladesh

研究代表者

野口 道彦（NOGUCHI MICHIIHIKO）

大阪市立大学・人権問題研究センター・教授

研究者番号：00116170

研究成果の概要：

近年、清掃労働にムスリムの人々やベンガル・ヒンドゥーの人々が参入し、もはや伝統的な清掃カーストの人々（ハリジャン）の独占する職種ではなくなってきた。ハリジャンの人々が清掃労働以外の職に就くための諸条件を多角的に検討し、パネル調査のための基礎データの収集を行った。あわせて有価廃棄物回収児童の実態、ハリジャンの権利擁護団体の結成の意味と課題、英領期の 19 世紀のベンガル地域におけるゴミと屎尿処理を中心に衛生問題を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2007 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2008 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
年度			
総計	9,500,000	1,850,000	12,350,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：差別問題・清掃労働・カースト・社会移動・環境問題・エスニック・文化

## 1. 研究開始当初の背景

この研究は、「バングラデシュにおける清掃労働者の研究 - マイノリティー・グループをめぐる葛藤と共生 -」（科研費研究 2002 年～2005 年度）の成果を踏まえた研究である。「バングラデシュにおける清掃労働者の研究」では、ほとんど社会学的なメスが入られていないヒンドゥーの最下層に位置するといわれている清掃人カーストの生活実態を明らかにした。かれらは自らをハリジャンと呼び、インドから移住してきたと語る。この集団を伝統的なヒンドゥーの清掃人カーストとすると、市に雇用されている清掃労働者には、それ以外にも、ムス

リムの人々も従事している。また少数であれ、伝統的な清掃カーストに属さない下層のヒンドゥー集団も清掃労働に従事していることがわかった。このように宗教、カースト、階層が複雑にからみあって都市の下層労働者の世界が構成されている。このような人々をめぐる社会的関係のありかた、社会移動のありかたを解明することは、バングラデシュ社会のありかたを理解する上できわめて重要な意味をもつと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、バングラデシュにおける多様な清掃労働者諸集団の実態の把握と、その成員の社会移動、およびその諸条件の解明を試みる。

清掃労働に従事しているのは、伝統的なヒンドゥーの清掃カーストのみではなく、清掃カーストに属さないヒンドゥー集団（ベンガル・ヒンドゥー）マジョリティであるイスラム教徒の都市底辺層である。また、清掃労働は、大別すれば市雇用（常雇、臨時雇）のものと同業的・請負的労働に分けられる。また、児童などによる有価廃棄物を回収する周辺の労働もある。それぞれの就労形態により安定性・収入が大きく異なる。清掃労働に焦点を絞ることによって都市の変動のありかたや社会移動の実態を、宗教、カースト、階層が複雑にからみあった諸集団の葛藤と共生を明らかにしたい。その場合、都市下層の人々の就労、生活状況、就学・進学状況、エスニック集団・カースト集団のアイデンティティの変容のありかたなどを中心に分析する。

## 3. 研究の方法

共同研究者であるチッタゴン大学のイフティカル・チョドリー博士の協力を得て、チッタゴン市およびダカ市を中心に現地調査を行った。方法は、清掃労働者地区(sweeper colony)の生活・就労実態を明らかにするために質問紙を用いた世帯主・世帯員調査を行った。

また、今回の調査をパネル調査の第一次調査として位置づけ、8歳～16歳の子どもたちを対象に、好きな学科、進学・就職希望、家庭での手伝い、友人関係、生活時間などを聞き取り、今後5年後、10年後、20年後の追跡を行うための基礎的データの収集をした。このデータは、今後、どのように進学・中退し、どのような職業につき、コミュニティでどのような役割を果たしていくのかを明らかにするためのものである。また、数人の子どもを対象にさらにインテンシブな聞き取り調査を行い、質的に深みのあるデータを収集した。

また、清掃労働者をめぐる労働組合・マイノリティの権利擁護団体などの政治・運動状況についての調査、資源リサイクルの担い手の調査、清掃事業・環境をめぐる歴史的経緯についての文献調査など、多角的な視点から調査研究を行った。

## 4. 研究成果

(1) Jahautola と Fringibazar で悉皆調査  
以前の助成研究では、チッタゴン市の4つの清掃労働者コロニーのうち最大規模の Bandel Sweeper Colony (以下、BSC と略称) とそれに次ぐ Madarbari Sweeper Colony (以

下、MSC と略称)において世帯調査(悉皆)を行った。そのため今回の助成研究では、残り2つのコロニー Jahautola Sweeper Colony (65世帯、以下 JSC と略称) と Fringibazar Sweeper Colony (38世帯、以下 FSC と略称) で悉皆調査を実施し、ともに全世帯から回答を得ることができた。両 SC の世帯はともに、すべてハリジャン世帯で、ベンガル・ヒンドゥーやムスリムの世帯は居住していない。これらの地区は、清掃労働者の従業員住宅としての性格をもち、世帯員の誰かが CCC の清掃労働者として働いていなければ、ここには住めない。ほとんどの世帯主は現在の地区か、または市内の他地区(SC)の出身である。SC以外の一般地区出身は皆無であった。なお、数名がインドで出生し、移住してきている。

世帯主の年齢の最頻値をみると、JSCでは20歳代(44.6%)、FSCでは30歳代(42%)と、FSCの方がやや年齢が高い。このためか、JSCの平均世帯収入は最頻値が3,000タカ代であるのに対し、FSCは4,000タカ代とやや高い。バングラデシュ全体の賃金水準に照らせば、どちらのSCにおいても大多数の世帯が下層中流階層に相当する。両SCの9割以上の世帯がテレビを所有し、ケーブルテレビの加入率もJSCで51%、FSCでは63%に達している。

識字能力に関しては、ベンガル語・ヒンディー語ともに、両SCの世帯主間に顕著な差はみられない。ただしMSCと比較すると、両SCの識字率は高い(表1)。

生活水準や識字率などに代表されるように、両SCの世帯主を比較しても、多くの点において、大きな差異はみられないが、コロニー外との交友関係には、JSCの場合は「ムスリムの友人」(従って他地区に居住している友人を意味する)を持つ世帯主の割合が14%と極端に低い。FSCでは61%に達している(表2)。またムスリムの友人を自宅に招いた経験の有無についても、FSCは、JSCよりも3倍以上多い。このような差異は、地区外の社会との交流の程度をあらわしているが、同様の出自と職業をもつSCであるが、SC間の差異があることは注目される。このように顕著な違いが生じる原因については、今後の継続研究の課題である。(佐藤彰男・野口道彦)

表1 識字能力の比較

	ベンガル語		ヒンディー語	
	新聞を読める	手紙を書ける	新聞を読める	手紙を書ける
Jahautola	50.8	49.2	29.2	24.6
Fringibazar	52.6	52.6	34.2	26.3
Madarbari	35.9	20.7	5.4	3.3

単位：%

表2 地域外との交流

	単位：%	
	ムスリムの友人がいる	ムスリムの友人を自宅に招いた経験がある
Jahautola	13.8	16.9
Fringibazar	60.5	52.6
Madarbari	45.7	34.8

## (2) パネル調査のための基礎データの収集

本調査の中心的なテーマは、清掃労働者の社会移動の可能性である。これまでは、祖父母、親から子へと清掃労働が世襲的に継承されてきた。この固定性は、清掃労働への差別、不就学・低学歴が生み出してきたものである。しかし、ムスリムやベンガル・ヒンドゥーなどが相対的に安定した市雇用の清掃労働者市場として参入してきている。もはや清掃労働は、ハリジャンたちが独占的に従事する職業ではなくなってきた。そのような状況の変化のなかで、SCの子どもたちは他の職業領域に進出せざるをえないのであるが、その条件は整っているのか。もし、他の職業への進出が阻まれるのであれば、高率の失業者をかかえることになり、さまざまな社会問題を抱え込むことになる。このような問題意識から、子どもたちの清掃労働についての考えかた、清掃労働以外の職業への就労希望の有無、他の職業への可能性、通学・ドロップアウトの状況、交友関係の実態などについて聞き、他の職業に転出を促進する要因・阻害する要因を明らかにすることを目的とした。これを一時点の調査にとどめることなく、今後、パネル調査として継続的に調査するために、今回は第1次調査として基礎データの収集に努めた。

対象地区は、BSC や FSC でも試行的に調査を行ったが、最終的には MSC を対象とした。MSC の就学している子どもは、4歳から10歳77人、11歳から15歳40人、16歳から18歳4人、計121人であった。これらに加えて、中退したもの（失業中のもの）も対象とした。これらの子どもたちを母集団として、12-16歳（調査時点の年齢）男女で合計15名（男子14名、女子1名）から、上記の項目に関して聞き取り調査を2007年9月、2008年3月と8月、9月に行った。また、合わせて、直近の1日の行動記録を時系列的に詳しく聞き取りをした。これにより子どもたちの日常の生活行動を把握し、理解するためである。

それによる知見は、次のようなものである。a) 基本的に清掃労働は高く評価されていない。b) 「将来、つきたい職業」では、「医者」、「銀行員」、「コンピュータ技師」、「サッカー選手」など非常に高い理想を掲げる場合と、「小間使い (peon)」など極めて現実的なビジョンを示す場合との2極化の傾向がある。ところが、これらの回答を経て「2番目になりたい職業」を訊ねると、いずれとも市雇用の清掃労働と回答する。理想が高くても低くても、「夢が叶わない」ときの落ち着き先として、清掃労働が意味づけられている。そこで理由と訊くと、「市雇用清掃労働だと、水道やトイレ、電気の整った住宅を確保でき、親と同居できる」という反応が一樣に返ってきた。子どもたちにとって清掃労働は安定した暮らしを保証するものと映り、その意味で信頼できる仕事として積極的に価値づけられている。

次にc) 「通学状況」と「交友関係」については次のことが判明した。調査では、学校通学者は9人、中退した者は6人いた。この2者を比較すると、通学者は地区外の者（ヒンドゥーとムスリムの両方）と広く親交をもつが、ドロップアウト者の交友関係は大体 SC 内部に限定される。学校は交友関係の拡大化の装置となっている。学校は教育の場であると同時に、多様なコミュニケーションから各種情報を獲得する場でもあり、コミュニケーション能力をはじめ、いわゆる社会力を高める場でもある。他の職業への就職、地区外への転出など、通学グループと中退者グループのあいだで差異が現れるかどうかを吟味することが、今後のパネル調査の課題となる。

また調査では、学校中退者にその理由を聞いた。結果は「家族内部の稼ぎ手の死別や退職などのため家計を助ける必要が出てきたため」というもの大半であった。それに関わらず、中退者は労働経験がまったくなく、失業状態のものがほとんどである。市雇用の清掃労働者も採用の機会は少なく、待機待ちが多い。そのため学校中退の根本的要因は「清掃労働への執着性」にあるという見方が成立する。清掃労働以外に身近な職業モデルがなく、たとえ努力して中学、高校と進学しても、市雇用の清掃労働者ほどに安定し職業につけるという可能性を現実的に実感することもないことが、安易に中退の道を選ばせている。しかし、テレビ、インターネットなど外部社会の情報は、SCの子どもたちの間にも急速に浸透している。これらのメディアがもたらした

た情報、および学校における「知」の文化と、SC という慣れ親しんだコミュニティの文化の落差は大きい。これら三者の「知」の動的関係（ダイナミズム）を、さらに詳しく考察する必要がある。（坂本真司・野口道彦）

### (3) ダカとチッタゴンにおける有価廃棄物回収児童の実態

市雇用の清掃労働の周辺には、市内やゴミ投棄所で有価廃棄物を回収する児童の存在がある。廃棄物管理における社会配慮の視点から、適切かつ効果的な廃棄物管理事業を行うにあたって有価廃棄物がどのように回収されているのか、さらにはそれに従事する者（しかも児童）がどのような社会経済的枠組みの中で位置づけられる必要があるのかを探ることは重要である。しかしながら、それについての調査はバングラデシュ、南アジアでは非常に少なく、その必要性や重要性が看過されている。

3年間の文献調査および現地での聞き取り調査及びアンケート調査の成果として理解できたことは次の点である。a)有価廃棄物回収児童は一般社会から偏見と差別的な眼で見られているが、有価廃棄物を提供する商店主、ジャンクショップの仲買人など回収児童に係る人々は差別視せず、激励していることである。b)NGO や政府系の学校に通いながら、家計の一助となり、貧困削減に努めている。c)回収児童の活動は廃棄物のリサイクルによって廃棄物の減量化に貢献している。d)彼らは日常的に怪我や病気の危険にさらされており、彼らに対するセーフティネットは少なく、行政が適正なる政策を講じるべきである。（三宅博之）

### (4) 清掃労働者の新たな全国組織 BDHR と BDERM の形成

バングラデシュの清掃労働者は、ヒンドゥーとムスリムによって構成されている。清掃労働者たちの労働条件改善や社会的地位向上運動には、国・市雇用や民間雇用を問わずムスリムとヒンドゥーが共闘することが理想である。しかし、バングラデシュの清掃労働者を取り巻く環境には、少ない雇用チャンスを巡る激しい競争や、複合的な利害対立が存在している。これらの問題を解決するために、ダカ市ではダカ市清掃労働者組合があり、ヒンドゥーは全国組織である Bangladesh Harizon Okiya Parishad（バングラデシュ・ハリジャン連合協議会、以下 BHOP）を設立している。これら2つの組織は、利害対立のため連携が難しく、大きな成果を上げることができないでいる。

このような状況下において、新しい動きがあらわれた。ヒンドゥーの清掃労働者たちが全国組織化を目指す団体、Bangladesh Dalits Human Rights(以下 BDHR)である。BDHR はムスリムの NGO、Nagorik Uddyog などのサポー

トにより 2002 年に設立された。この組織の理念は、清掃労働者のみならず、ヒンドゥーのすべてのマージナルな地位に置かれている人々（Dalit）の連帯にある。同組織のメンバーたちは、ムスリムが運営する NGO や国外の人権擁護団体などと連携し、生活環境改善や地位向上運動などを展開している。

BDHR は当初、ダカ市の小さな PWD 清掃労働者コロニーを中心に形成し、全国組織化を目指していたため、旧来の全国組織 BHOP などと対立関係にあった。この状況を改善すべく、BDHR のメンバーたちは、積極的に他の団体に働きかけ、2008 年 4 月に新しい組織 Bangladesh Dalits and Excluded Rights Movement（以下 BDERM）を設立した。この BDERM は、BDHR、BHOP を含む 19 のダリット団体が緩やかな連合体を形成している。BDERM が組織化されたことにより、真のダリット全国組織が誕生し運動を活発化させようとしている。

BDHR は大多数のダリットや清掃労働者を代表している組織とは言えず、積極的には政治への働きかけは行って来なかった。しかし BDERM は、2008 年 12 月に行われた国会議員選挙時には新しい動きを見せた。具体的には、アワミ連盟、バングラデシュ共産党、バングラデシュ社会主義者党などの政党に積極的に働きかけ、これらの政党のマニフェストにダリットの人々に対する差別撤廃などの文言を書き込ませることに成功した。このダリットという言葉が、政党のそれに書かれたのはバングラデシュでは初めてのことであった。今後の BDERM の政治的な目標は、国会や地方議会での留保議席、清掃労働以外の公務員の留保枠などの獲得である。選挙でのダリット議員の選出も戦略課題としている。

また、女性組織や若者組織も活発に活動している。Dalit Women Forum は、ダリットの女性への差別撤廃をセミナーやデモにより訴えている。また、Nagorik Uddyog の外郭団体である NGO の Partnership of Women in Action と連携し、ハンディクラフトの作成、販売を行うことにより現金収入を稼ぎ、家庭内での女性の発言権向上を目指す運動などを展開している。Dalit Youth Forum は、人権に関する勉強会を開催し、セミナーでは教育の重要性を訴え、BDERM の奨学金設立に貢献した。

今後の BDERM の課題は、地方のダリット組織や人々の意見をいかに吸収し、集約するかにある。BHOP の幹部はダカ市の清掃労働者のみで構成されていたため、

BHOP は地方の意見を黙殺する結果となった。また集団としての凝集性に欠けていた。これに対し BDERM は、2008 年に 3 地方都市でワークショップと集会を行い、地方の意見を取り上げる姿勢を見せた。2009 年 1 月には、全国規模のワークショップをダカ市で開催し、都市中間層にダリットに対する差別撤廃を訴えた。しかし、すべてのダリットを含む組織の BDERM も事実上清掃労働者が中心で運営されているので、この点は改善が必要である。また、BDERM の活動をより影響力のあるものにするためにも、同じ排除されている人々としてムスリムの清掃労働者と協力関係を構築できるのかと言う問題もある。この点に関しては、若手幹部を中心とする賛成派と、シニア幹部を中心とする反対派とに分かれており、今のところ意見の一致を見ていない。特に協力反対派は、ダカ市などでムスリム清掃労働者が 85% 以上を占めていることを指摘し、ムスリムが入ってくれば数の力で圧倒され、ヒンドゥーたちにとって利益をもたらさないと考えている。そのため、現段階の BDERM の活動は、ムスリムの清掃労働者の協力関係構築を目指すものではない。しかし、ヒンドゥー清掃労働者とムスリムにより運営されている NGO との協力関係のもとで、さまざまな活動が展開されており、ヒンドゥーとムスリムの連携がいかに育っていくのか、今後の動きに注目したい。(佐野光彦)

#### (5) 「物乞い」の少女と視点の相対化

バングラデシュの「貧困層」としての SC の清掃労働者集団と接するうちに、その周りにもっと大きな「最貧困者」層の存在を知り、それを考えるなかで調査の新たな視点や方法を模索することが出来た。それはイスラム社会にもヒンドゥー社会と異なる形で存在すると考えられる、カースト制的な「身分差別」の中にいる人たちを取り上げる視点にもなる。

「最貧層」の定量的な分析に定性的な分析を交差させるために、特定の 1 人に対してパーソナル・ヒストリーの聞き取りを計画した。チッタゴンの NPO を通して、一人の「物乞い」の少女(片手・片足を失っているというハンディキャップのある)の聞き取りである。その少女には、幾つかの NPO が行事等を通してある程度の関わり合いを持ってきている。しかしインタビューは出来なかった。その少女は、いま一つの社会、「闇の社会」と当地でも表現される社会に組み込まれているためだと言う。

彼女の「仕事」によって、彼女自身とその周りの者たちが生きている「共同社会」がある。彼女たちは、たまたま例外的に「飢えた子供たち」ではなく、それによって何十年、何百年と生き続けてきている「社会」の構成部分となっている。それは社会システムとし

て、構造化されている存在である。

「闇の社会」とする立場と、その中に居ながら決してその社会を「闇」と思っていない立場がある。「先進国」が「途上国」問題をみる視点にも、似たものがある。ある側面からの聞き取り調査を越えて、社会構造の分析をしようとするとき、調査側の視点や在り方が問題になる。現地の一少女とのヒアリングのための接触への努力の過程で、広がってきた問題意識である。観察者が客観的と見なしている調査・分析の範囲と視点を、相対化しなければならないと思う。「闇の社会」と考える者と「闇の社会」と考えもしないかもしれない者との、接点を見つける実態調査を発展させることを今後考えている。(谷口弘行)

#### (6) ベンガル地域における清掃労働者の形成過程

英領期の 19 世紀のベンガル地域における清掃労働者の形成過程を歴史的に明らかにするためにカルカッタで史料収集を行い、廃棄物と尿尿の処理に限定して都市衛生史をより広い文脈の中に位置づけることに努めた。

19 世紀前半、疫病の原因はミアズマであると理解され、衛生問題が都市行政における最大の課題となった。第一は、下水・排水を如何にして行うかという問題、第二は、廃棄物の処理の問題であり、1859 年から始まる暗渠式下水道の建設と 1867 年に着工された廃棄物処理のための鉄道建設によって、状況は大きく変化した。同時に、民間(私的)業者による清掃労働者の雇用の段階から、市(都市自治体)による清掃労働者の雇用の段階へと変化した。このようなインフラ整備にもかかわらず、乾式便所という極めて労働集約的なサービスを必要とする制度が、都市自治体の関与とともに長らく残存した。それは、経費の節約という行政の側の事情(納税者であるインド人中間層の意向を強く反映している)によるものであった。また、世帯内で賄われるべきサービスが、世帯の外部へと外注されるという南アジア社会の社会的分業のあり方により、清掃という不浄の行為をできるだけ身の回りから外部化するという社会のマジョリティの傾向と、そのような行為を世襲的に担うマイノリティの存在によって強く規定されていると考えられる。(脇村孝平)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

坂本真司「デジタル・メディアを用いたエンパワーメント戦略の実態 チッタゴン市近郊における『ヴィレッジ・フォン』の成果と課題」2008年5月、日本都市学会年報第41号、pp.100-109、査読あり。

三宅博之「バングラデシュ・チッタゴンにおける有価廃棄物回収児童 - そのイメージとリアリティ」『ワールド・トレンド』(アジア経済研究所)2007年10月号、査読あり。

佐藤彰男「ヴィレッジ・フォンの現状と課題」2007年9月、『情報通信学会誌』(情報通信学会)、第25巻2号、33~40頁、査読あり。

〔学会発表〕(計10件)

野口道彦・佐藤彰男「清掃労働者の社会移動」日本南アジア学会第20回大会、大阪市立大学、2008年10月6日

佐野光彦「清掃労働者の連帯の可能性：ダカ市清掃労働者組合などを事例にして」日本南アジア学会第20回大会、大阪市立大学、2008年10月6日

坂本真司「清掃労働者コミュニティにおけるメディア文化の形成：衛星TV放送の受容を中心に」日本南アジア学会第20回大会、大阪市立大学、2008年10月6日

三宅博之「清掃労働における価値転換：開発・政策学、特に廃棄物管理の観点からの清掃人研究の位置づけ」日本南アジア学会第20回大会、大阪市立大学、2008年10月6日

脇村孝平 Scarcity of Land, Division of Labour and Service Sector: The Labour-Intensive Path of Development in Modern South Asia, Joint Workshop on Labour-intensive Industrialisation in South and Southeast Asia Kyoto University, Japan, December 20-21, 2008.

〔図書〕(計9件)

佐藤彰男「途上国の都市と貧困問題」『21世紀の都市像 地域を活かすまちづくり』(近畿都市学会編)2008年10月、古今書院、245~255頁。

三宅博之『開発途上国の都市環境 - バングラデシュ・ダカ 持続可能な社会の希求』明石書店、2008年3月

三宅博之「バングラデシュ・チッタゴンにおけるリサイクル事業の諸相 - インフォーマル部門製紙業および有価廃棄物収集にかかわる児童労働に焦点をあてて」小島道一編『アジアのリサイクル』アジア経済研究所、2008年3月

脇村孝平「国際保健の誕生 - 19世紀におけるコレラ・パンデミックと検疫問題」遠藤乾編『グローバル・ガバナンスの最前線 現在と過去のあいだ』東信堂、180-200頁、2008年。

佐野光彦「バングラデシュのエルシャド政

権崩壊過程 - 政軍関係と民主化運動」2008年3月、博士(法学)取得、法博乙第5号(神戸学院大学)

佐野光彦「バングラデシュにおける生命倫理問題に関する予備的考察」(神戸学院大学法学研究科アジア太平洋研究センター編『平成18年度 研究活動成果報告書：グローバル化時代における「アジア的価値」に関する実証的・学際的研究：研究プロジェクトの総括』)2007年3月、284~291ページ。

Taniguchi Hiroyuki & Golam Hossain ed.,

Local Governance and Poverty Reduction in Bangladesh' Asia Pacific Research Center, Kobe Gakuin University, 2007.  
(pp.1~180)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

野口 道彦 (NOGUCHI MICHIOHICO)  
大阪市立大学・人権問題研究センター・教授

研究者番号：00116170

### (2) 研究分担者

脇村 孝平 (WAKIMURA KOUHEI)  
大阪市立大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：30230931

佐藤 彰男 (SATO AKIO)  
大手前大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：70249514

三宅 博之 (MIYAKE HIROYUKI)

北九州市立大学・法学部・教授

研究者番号：60211596

谷口 弘行 (TANIGUCHI HIROYUKI)

神戸学院大学・法学部・名誉教授

研究者番号：40068234

坂本 真司 (SAKAMOTO SHINJI)

大手前大学・人文科学部・非常勤講師

研究者番号：20425094

佐野 光彦 (SANO MITSUHIKO)

神戸学院大学・法学部・研究員

研究者番号：30446033

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

イフティカル・チョドリ (IFTEKHAR U. CHOWDHURY)

チッタゴン大学・社会学部・教授